



くるくるバス

ように聞いているか。また、今後利用者を確保する対策及び新路線の検討はなされていないのか伺う。

答弁 路線ごと利用者数を見てみると、くるくるバスについてはほぼ横ばいであり、月平均利用者数は、東回り・西回り合わせて八千人で推移している。一方、平成十八年から運行を始めた南部循環、高江土川線などの廃止代替バス、及び昨年から運行を始めた北部循環バスについては、いずれも年々増える傾向にある。また、新規路線については、競合する民間路線バス事業者との意見調整や現行路線バス等の運行状況を考慮しながら、調整機関である住民代表や事業者など、関係者で組織する「地域公共交通活性化協議会」において研究している。

学校教職員とスポーツ少年団との関わりについて



大田黒 博

質問 各地域でスポーツ少年団が活発に活動しており、地域でもその活躍が期待されている。学校教職員が団活動に積極的に参加し、学校行事との関連を踏まえて少年団運営に協力して三者連携(学校・家庭・地域)をもとに、健全な青少年育成が図れるように団の指導者、父母会との対話を重ねながら協力体制がとれないか。

答弁 学校においては、スポーツ少年団には関心を持ち、児童の安全や健康な生活リズムに配慮しながら連携に努めている。また、スポーツ少年団活動をおして努力することの大切さや、仲間と力を合わせて頑張ることのすばらしさを学ばせるよい場ととらえている。今後とも学校とスポーツ少年団関係者が互いに連携を図りながら、児童・生徒に過重な負担をかけることなく、バランスのとれた健全なスポーツ活動が展開されるよう、校長研修会やスポーツ少年団の理事会等を通して指導してまいりたい。

農業経営の強化策について



永山 伸一

質問 本市の農業を取り巻く環境は農家の高齢化が進行している。今後の農業振興について魅力ある農産物の生産や活力ある地域農業を図るためには農業生産基盤である耕作放棄地の解消や畜産経営の基盤強化策として飼料用米の生産・利用に取り組みないか伺いたい。



園芸重点七品目の一つのきんかん

答弁 園芸重点七品目を中心に推進を図り、作物の導入については、各種補助事業や技術指導者等による支援を行なう考えである。推進にあたっては、地域の実情を踏まえた適地適作による作物の選定を行い、優良農地の荒廃防止を図るとともに、耕作放棄地対策協議会の活動によって、耕作放棄地の解消を図りたい。また、自給飼料確保により、食料自給率の向上、生産コストの低減、経営安定化、家畜排泄物の装置への適切な還元による畜産環境保全を図り、遊休農地の活用が図られることから、飼料用米の生産利用について国の支援策を通じて農家を支援していくことも必要である。